

研 究 者 か ら の メ ッ セ ー ジ

研 究

— けんきゅうびより —

日 和

Vol.
05

研究は楽しい。
膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。
それまでわからなかったことを解き明かす感動、
そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、
「なぜ?」「好き」をとことん追究する、
そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って
輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。



松原 洋子 副学長



P.02 [Special Talk #01](#)

家庭・育児と研究を両立する
女性研究者の活躍

長谷川 知子 理工学部 准教授



P.04 [Special Talk #02](#)

研究者であるより臨床家として
網膜再生医療研究の世界トップを走る

高橋 政代 株式会社ビジョンケア 代表取締役社長
リサーチライフサポート室キャリアアドバイザー



P.06 [Special Talk #03](#)

「当たり前」に疑問を持つ
それが研究の出発点

小川 さやか 先端総合学術研究科 教授

P.08 活動紹介

家庭・育児と 研究を両立する 女性研究者の活躍

松原 洋子 × 長谷川 知子

副学長

理工学部 准教授



世界トップレベルの研究を続ける 最優先事項を明確に、子育てと両立

松原 日本の理工系分野で活躍してきた女性研究者の多くは、家庭と研究のトレードオフではなく、「やりたいことをやってみよう」と



挑戦するマインドをお持ちのように感じます。長谷川先生はいかがですか。

長谷川 非常に共感できます。特に女性の研究者の場合、一定期間に博士号の取得、就職、海外留学などのキャリア形成と結婚・出産などのライフイベントが重なります。そのため、自分のやりたいことを成し遂げるように様々なことをうまくバランスさせ設計することが求められる気がします。

松原 お子さんが生まれて仕事のやり方や考え方に変化はありましたか。

長谷川 働き方は大きく変わりました。以前のように夜や週末に研究するというわけにはいきません。そのため優先順位をつけて順

位の高いことに絞って取り組み、これまでの研究を維持しようと努力しています。

松原 優先順位の高いことは何ですか。

長谷川 世界に影響力のある、そして社会に役立つ研究を継続することが最優先事項です。そのために論文を書き、発表し、所属する研究コミュニティで最先端の研究を率いる立場に立ちそれをキープする必要があります。

松原 研究者の中には目の前の仕事に忙殺されて本来最優先すべき研究が後回しになってしまう人もいます。長谷川先生は明確な目的を持って、なすべきことを見定めておられるところがすばらしいですね。立命館大学に着任されて約1年、働く環境について率直な

感想を聞かせてください。

長谷川 自分のやりたい研究テーマを比較的自由に設定して取り組めるところがいいと感じています。また育児の面では学内保育園があるのは心強いですね。一方で子どもを持つ身としては、会議が時間外にあったり、担当授業の休講回数が制限される点は改善してほしいところです。何よりもっと女性研究者が増え、家庭のことを話しやすい環境になればいいと思います。

松原 私は2019年に女性初の副学長に就任しました。理事会でもジェンダーを巡る課題を提起する役割があると自任し、積極的に発言しています。立命館大学には、提言すれば

皆が耳を向け、課題を共有する空気があります。女性の学部長も増えつつあるし、理系の女性研究者も積極的に採用したいと考えています。長谷川先生もぜひ忌憚ないご意見をお願いします。

地球温暖化問題に飢餓・貧困の視点を 取り入れたところにインパクトがあった

松原 地球環境問題をめぐる研究は数多くありますが、長谷川先生の研究はそこに飢餓や貧困といった人の尊厳や人権に関わる軸を取り入れたところがすばらしいと思っています。

長谷川 飢餓や貧困を取り入れた背景には、



私自身が以前からこういった国際的な社会問題に関心を持っていたことがあると思います。また、地球温暖化と食料生産の関係についてはこれまで研究されてきましたが、食料消費というもっと身近なところにどう影響するかまで踏み込んだ研究はなかったからです。最初の論文を比較的インパクトの低いジャーナルに投稿し、それを名刺代わりに同じ研究グループの研究者に「一緒にやりましょう」と呼びかけ、ネイチャー関連誌に掲載するまでに発展させました。

松原 地球環境問題から貧困や飢餓、一方でフードロスや肥満といった先進国の課題にまで結びつけたところ、さらに課題を可視化して解決のデザインを描き、提案されたところにインパクトがあったと思います。今後の立命館大学でのさらなる活躍を期待しています。

(取材／2020年1月)

長谷川 知子准教授
研究者データベース ▶



結婚して子どもを産んでも続けたい。
だから眼科を選んだ

松原 高橋先生は、昨今のコロナ禍を巡ってSNSで積極的にご意見を発信されていますね。

高橋 理由の一つは、でたらめな知識に基づいた間違った情報が一般の人々に流れることを危惧したからです。私自身、京都大学医学部附属病院（以下、京大病院）勤務時代に病棟の管理責任者として感染対策に携わった経験もあるので、「正しい情報を発信しよう」と思ったのがきっかけです。

松原 研究者の中には自分の専門の範囲内だけで活動する方もいますが、高橋先生は研究と社会の關係に自らコミットされているという印象を持っています。

高橋 眼科の中でも治療法の見つかってない難病を専門にしていることから、これまでに間違った情報に絶望し、人生が変わってしまう人を大勢見てきました。特に再生医療はまだマウスでの実験段階からマスコミに大々的に取り上げられた結果、希望にあふれて来院され、治らないとわかって二度目の絶望を味わって帰られる。そんな患者さんを見てきたことが、「正しい情報を伝えて安心してほしい」という思いの根底にあります。

Special Talk #02

研究者であるより臨床家として 網膜再生医療研究の世界トップを走る

松原 洋子 × 高橋 政代

副学長

株式会社ビジョンケア 代表取締役社長 リサライフサポート室キャリアアドバイザー

株式会社
ビジョンケア
ホームページ ▶



うにお考えですか。

高橋 京大病院の眼科病棟に勤務していた時、異例のスピードで病棟の管理責任者に抜擢されました。当初は「私にはできない」と不安でしたが、役職を与えられたことで自覚が芽生え、職務を全うすることができました。研究は当然「実力勝負」ですが、まず女性が特別視されない環境をつくることは、私も重要だと思います。

網膜の「治療」を作ることを目指し 「行き当たりバッチリ」で進んできた

松原 京大病院に勤務されていた1995年、おつれあいの留学を契機にアメリカのソーク研究所に研究員として赴任し、そこで網膜の再生医療研究を決意されたと伺いました。帰国後、研究が臨床のいずれを選ぶか、迷われたことはありませんでしたか。

高橋 それが私にとって大きな転機となりました。ソーク研究所で、眼科医としては初めて神経幹細胞の存在を知り、「私が神経網膜を作らなければ、5年は研究が遅れる」と使命感に駆られて帰国しました。しかし臨床と研究の両立は想像以上に大変で、あまりの辛さに諦めて一般の病院に移ろうと思ったことも

あります。そんな時、「頑張っしてほしい」とメッセージをくれたのが、義母でした。義母の理解と励ましがなければ、きっと心が折れていたと思います。

松原 高橋先生のように強い信念をお持ちでも、誰かの支えや励ましがなければ挫折しそうになることもあるんですね。

高橋 これまでの道のりは挫折の繰り返しでした。研究と臨床を両方できる場を求めて理化学研究所に転職した時もそうです。「世界最高峰」だと信じていた京都大学を辞して臨床医の間では無名だった理化学研究所へ移るのは、清水の舞台から飛び降りるような気持ちでした。以来、「網膜の『治療』を作る」という目標を定め、

それ以外は「行き当たりバッチリ」を座右の銘に、その場その場で道を選んできました。いよいよ網膜再生医療を事業化するところまでたどり着き、理化学研究所を辞めて株式会社ビジョンケアの起業を決意した時も、周囲には驚かれましたが怖くはありませんでした。

松原 なぜ研究だけでなく、臨床も続けてこられたのですか。

高橋 私は「研究者」というより「臨床家」であると自任しています。常に患者さんと接点を持ち、最新の治療動向や患者さんが求めているものを捉えなければ私の研究は枯渇すると考えているからです。現在も週1回、外来の診察を継続しているのもそのためです。また「ダブルメジャー」だからこそ新しいことを発見できると思っています。



育児も研究もプロジェクトと考えて マネージングする

松原 若い女性の研究者の中には、家庭も研究も100%できないことに傷つき、研究を諦めてしまう人がいます。そうした後輩にお言葉をいただけたらと思います。

高橋 諦めるところと、決して諦めてはいけないところを間違えてはならないと言いたいですね。どうしたら自分のやりたいことができるかを考え、あらゆる手段を駆使してほしい。私は家庭と仕事を区別せず、例えば子どものお迎えと食事の支度、色素上皮移植の研究などいくつかのプロジェクトがあると考え、マネージメントを行っていました。

松原 仕事、育児に限らず、人生では親の介護もあれば、自分自身が病気になることもあ

る。その都度目の前のタスクをプロジェクト化して解決するというわけですね。

高橋 多くの場合、道を妨げるのは、環境よりむしろその人の意識だと私は考えています。最後に残るのは、自分自身の中にある差別感情です。私自身、もともとは心のどこかで「男性に『上』にいてほしい」と思っていました。それを乗り越えることが大切です。

松原 高橋先生のように前例のない道を切り拓いておられる方でもそんな思いを持っておられたのですね。まずは自分自身の差別観を自覚することが大切なのかもしれませんね。

高橋 その通りです。自覚できた時にきっと変われると思います。

松原 本日は貴重なお話をありがとうございました。（取材／2020年6月）



Special Talk #03

未知なる世界を探究する 研究者になるまでの ライフストーリー

松原 洋子 × 小川 さやか

副学長

先端総合学術研究科 教授



▲
小川 さやか教授
研究者データベース

「ここではないどこかへ行きたい」。
それが研究の原点

松原 本日は、小川先生の背中を追いかける子どもたちや若い人たちに向けて、研究者になるまでのライフストーリーを語っていただきたいと思います。まずどんなお子さんだったのかを聞かせてください。

小川 子どもの頃から本が好きで、休日は家に籠り、推理小説を積み上げて片っ端から読むのが楽しみでした。当時から大人が読むような本もたくさん読んでいました。

松原 著書のあとがきに「変な子だと言われ続けてきた」と書かれていますね。

小川 仲の良い友達はいましたが、集団生活は苦手で周囲からは「風変わりな子」と受け止められていたかもしれません。今でも忘れられないのは、中学生の時、担任の先生が選んだ本を読み聞かせ、道徳的な教訓を話す時間がとにかく嫌いだったこと。本から何を感じ

じ取るかはそれぞれの個人の自由ではないかと考えていました。世の中の常識や道徳的な教訓に疑問や反発を覚えたことが、文化人類学に関心を持つことに影響したと思います。とはいえ両親の他、中学でも高校でも、かわいがってくださる先生との出会いがあったおかげで、大きく道を逸れずに歩んでくることができました。

松原 小川先生の個性を理解・評価し、尊重してくれる大人が周囲にいたのですね。その後、信州大学に進学されましたが、進路を選んだ理由、また文化人類学の研究に進むいきさを聞かせてください。

小川 ずっと「ここではないどこかに行きたい」という思いを強く持っていました。信州大学を選んだのは、高校時代に山岳小説を読み、大学で山登りをしたかったことと、実家を離れ、遠い場所で一人暮らしをしたかったから。大学時代は山登りの一方で、海外旅行にもよ

く行きました。文化人類学との出会いは、2回生のゼミ選択の時。未知なる世界の話はワクワクしますね。ただ、文化人類学に関心を持ったのは事実ですが、大学院に入学するまでは「海外で暮らす」目的のほうが大事でした。京都大学大学院のアフリカ・アジア地域研究研究科に進学し、アフリカを対象地域に選んだのも、アジアに比べて地理的にも文化的にも「遠い」ことが一番の理由でした。

松原 本好きと聞くと内向的なイメージですが、小川さんは本の中の想像世界に留まらず、山や海外など「ここではない遠いところ」へ行って、活動することにも魅力を感じられたのですね。それからは文化人類学の研究一筋ですか。

小川 最初は漠然と「経済」について考えたいて考えていました。当時から資本主義経済とは異なるシステムで回っている経済に関心を持っていました。お金がなくても経済が回り、国家がなくても社会が成り立つなど、世界には、自分が当たり前だと思い込んでいるものとは異なるシステムがあると知り、「見に行きたい」との思いを強くしました。それが今日のインフォーマルエコノミーの研究へとつながっていきました。



松原 研究の原点はずいぶん早い時期にあり、それが「文化人類学」という学問との出会いによって、かたちを与えられたのですね。

うまくいかないことや失敗が、
後に生きることもある

松原 もし中学生や高校生が大学で学ぶとしたら、どんな学びがあると楽しいでしょうか。

小川 フィールドワークや実験に参加したり、答えのない問題を議論したりできれば、きっと楽しいと思います。また大学での学びに触れて、「自分の考えていることなんて、大したことではない」と思えたら、もっと楽な気持ちで学びと向き合えるのではないのでしょうか。

松原 コロナ禍で留学や海外での研究がままならなくなり、困っている学生や研究者もたくさんいます。そうした方々にアドバイスをお願いします。

小川 中学・高校で皆が同じ授業や行事に取り組み、周囲と同じように大学を卒業したら就職するという均一のルートを内面化しすぎると、少しでも道を外れた瞬間に不安になるかもしれません。けれど「皆同じ」人生はいずれ終わります。それぞれ人間が多様な縁や偶然と関わりながら個々の人生を歩んでいくこ

とになるし、どの人生が成功なのかに明確な答えはありません。研究がうまくいかないことも人生につまりずこともあるけれど、その失敗が10年後に別のかたちで生きることもあります。だから「ままならない」自分を責めすぎず、ままならない状況だからこそできることに創造力を働かせてみてください。

(取材／2020年10月)



ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)に採択されました。

Creating Futures プログラム

実施期間:2020年～2025年

特長

Creating Futures プログラムの一貫としてテニュアトラック助教プログラム、フューチャー准教授プログラム、フューチャーリーダープログラムを創設し、女性研究者のポストドクトラルフェローから無期雇用教授へのキャリアをつなぐ支援を行うとともに、国際的に活躍できる女性研究リーダーの育成を目指します。

支援内容

女性研究者のキャリアパスをつなぐ制度の創設

女性研究者のキャリアパスをつなぐ制度を創設するため、以下の2プログラムの具体化を図る。

テニユアトラック助教プログラム

専門研究員（ポスドク・フェロー）の次のキャリアパスとなる雇用種別（助教相当）に女性限定枠を創設し、専門研究員の期間と合わせて研究者としての成長に専念できる環境整備を行う。

フューチャー准教授プログラム

学部において女性准教授の採用に向けた積極的な施策（女性限定の公募人事等）を実施して採用に至った場合、効果的な組織運営や女性研究者支援に資するインセンティブを付与し、学部の研究環境整備を支援する。

フューチャーリーダープログラム

若手女性研究者を国際派遣や国際共同研究・スキルアップ等多面的に支援することを通して、研究成果の創出を後押しすることによって、上位職登用への一層の推進を図る。

グローバル研究リーダー育成プログラム

学外研究・研究専念教員制度を活用し、女性研究者が帰国後に国際共同研究ユニットのユニット長に就くことで、その後の研究リーダーへの役職の足掛かりとする。

女性研究リーダーの育成について改善を図るため、女性研究者が単独またはプロジェクトリーダーとして、海外研究機関や海外研究者との国際共同研究を実施する期間中の教育や研究室運営を代わりに担う教員の雇用費用、託児費用などにも執行可能な予算を設ける。

企業リーダー育成プログラム

女性のキャリアアップ支援とスキルアップを図ることを目的として、企業ニーズを踏まえたリカレント教育として、女性リーダー育成プログラムおよび育休中キャリアアップ支援プログラムを実施する。

取組概要

平成28(2016)年度に採択されたダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)の取組を通して自然科学系無期雇用教員(教授、准教授)の女性比率が上昇しない課題を把握しました。本事業では女性研究者の裾野拡大、採用、育成、上位職登用までの一連のキャリア支援を視野に入れたCreating Futures プログラムを構築し、女性研究者のキャリアアップを重点的に図ります。

